

音声学から考える商標の称呼の類否 第17回

サブタイトル:聴覚障害から考える聞こえやすい音とは

弁理士 池山拓治

0. 復習

今回はパスバンドと等感曲線から考える聞こえやすい音について書きました。

今回は音声が見えにくい障害がある場合においても聞こえる音は聞こえやすい音で、音声が聞こえにくい障害があると聞こえにくい音は聞こえにくい音であると考え、聴覚障害について検討することは意味があることと考え、コラムの最終回として、この項目を挙げることにしました。

1. 聴覚障害の種類

聴覚障害には複数の種類があります。代表的な種類だけを挙げると、伝音難聴、感音難聴、混合難聴の3種類です。各種類とその特徴は以下のとおりです。

伝音難聴:外耳や中耳に障害がある。

伝音難聴の特徴:音が小さく聞こえる。

感音難聴:内耳に障害がある。

感音難聴の特徴:音がこもったり、歪んだ状態で聞こえ、はっきりとは聞き取りにくい。

老人性難聴や騒音性難聴も感音難聴に含まれる。

混合難聴:伝音難聴と感音難聴の両方を併せ持つ。

混合難聴の特徴:上記の特徴を併せ持つ。

2. 感音難聴が示す聞こえ度

コラムの制限上、ここでは感音難聴を取り上げます。

感音難聴では高周波数帯の子音が脱落します。つまり、「か行」「さ行」「た行」「は行」「ば行」の子音が脱落しやすく、母音だけが残るように聞こえます。例えば「佐藤」と「加藤」の区別は難しくなり、聞き間違いが増えます。子音の中でも、特に無声摩擦音や無声破裂音は脱落しやすい傾向があり、聞こえにくい子音ということができます。このことはコラムの初めの方に書いた聞こえ度順に沿います。

なお、幼児が成長の過程で発することができるようになる音声の順はおおむね聞こえ度順に沿うことが多く、構音と聞き取りの難易度は比例するという説が説得力を持ちます。

3. 聞こえやすさの謎

音の聞こえやすさについては、様々な研究があるものの、まだ解明できていないことが多くあります。例えば、複数人が話すパーティーにおいても、相手の声を聞き取ることができるカクテルパーティー効果は、生の音声では働くものの、録音や電話の音声では働きが制限されます。雑音が多い場所で録音された音声や電話の声は聞き取りにくいと感じたことがあるでしょう。カクテルパーティー効果が働きにくいのは発達障害の一類型であることから、単なるサウンドスペクトログラム等の音響の問題ではなく、脳が作用しているともいわれます。

4. 予告

次回からは今までの総復習をし、このコラムを終える予定です。

以上